
とある私立探偵の事件簿・ファイル2 ～スポーツ新聞記者浮気事件～

リート

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

とある私立探偵の事件簿・ファイル2 ～スポーツ新聞記者浮気事件～

【Nコード】

N2494C

【作者名】

リート

【あらすじ】

とある私立探偵のもとにやってきた主婦。彼女は頼む。夫が浮気していないことを証明してほしい、と。状況は明らかに黒なのだが
……

パート1 チャレンジしてみる

探偵。

それは別に殺人事件に巻き込まれてそれを解決する職業ではない。どちらかと言うと、人を探したり調査したりと言うのが主な仕事であって。

*

「いやあ、今日も忙しい。なあ？」

ゲンさんはテレビを眺め、せんべいをかじりながらそう呟く。

「忙しいですねえ……」

私は読書に夢中になりながら、うわの空で返事を返す。

「あれだよな、こう忙しいとストレスで死にそうになるよな」

お茶をずずつとすすり、ふうつと息を吐きながら窓の外を眺める

ゲンさん。

「ストレス、怖いですよねえ」

私はせんべいに手を伸ばしながら、いい加減な相槌を打つ。

ゲンさんはスポーツ新聞に手を伸ばしている。

「あれだぞ、ストレス溜めると病気になったりするらしいぞ」

「らしいですね。私は成人病のほうが怖いですけどねえ」

欠伸をしながら、私も別のスポーツ新聞に手を伸ばしてみる。

「おいおい、おっさんみたいな事を言うな。まだ若いだろうが」

スポーツ新聞をパラリとめくっているゲンさん。

「あらお世辞。財布がピンチなら晩御飯おごりますけど？」

パラリとスポーツ新聞をめくる。

目に飛び込んできたのは、その新聞の特別企画とやらで、もう一つのスポーツ新聞の女性記者と、ラブホテルを特集するというもの。

「お、うれしい申し出。今日は久々のご馳走だな」
スポーツ新聞越しに、目を輝かしながらこつちを覗き見るゲンさん。

「ご馳走っていうか、ファーストフードですけどね。マクド的なあれです」

「マクド？ ……ああ、マックの事か」

「いえ、マクドです。マックはパソコンです」

特集といっても単に女性記者とラブホテルに行つて、その内装をいろいろと紹介するだけ。ちなみに週一の全四回シリーズらしい。

「いや。ファーストフードの方もマックが正式な略称だろ」

「国際的にはマクドが主流らしいですよ」

「そーなのか？」

「テレビかなんかで聞いただけなんですけどね」

……。

まあ、その。今日は暇なのです。それも、かなり。

*

なんて延々と雑談をしながら暇を潰すのも探偵の仕事ではなく。

当然というか、私の地道な宣伝活動のおかげというか、ゲンさんのコネのおかげというか、とにかく、依頼人は今日もやってくる。

そして今回の依頼なのですが。

「こちらが夫の和彦です」

今回の依頼主は裏原美和子（本人の強い要望により仮名）さん、
四十一歳。

そしてその美和子さんが置いたのは、一人の男性が写った写真。

「浮気調査……と、いう事になるのでしょうか。その……調査して
いただきたいのです」

美和子さんはどこか戸惑った様子。おそらく、こつこつ所に来るのは初めてだと思われる。

「この方の素性調査、と言う事ですね？」

「……はい」

不安げに言って溜息を吐き、一口お茶を飲む美和子さん。

ちなみにお茶はゲンさんが入れてくれたもので、いつも通りにおいしく入ってます。

「では、詳しい話を聞かせてください」

私にはっこり微笑み、話を促した。

*

話を要約すると、こうなる。

一昨日の晩、スポーツ新聞の記者である夫の和彦さんが、見知らぬ女性とラブホテルから出てくるところを、美和子さんの友達の女性が見かけたらしい。

ほぼ黒の状況だが、和彦さんには話を聞けずにいるらしく、悩みに悩んだ末に探偵に調査依頼に来たらしい。

ちなみに最後の美和子さんの台詞が妙に印象的で。

「私は、夫を信じたいんです。……夫が、浮気をしていないと、私に信じさせてください」

*

終始落ち着かない様子だった美和子さんは、そわそわした様子のまま帰っていった。

「えつと。つまりは浮気調査……だよな？」

「ええ、一応は」

ゲンさんの戸惑いもなんとなく分かる。普通は、相手の浮気の証拠を探し出してくれと頼まれるものなのに、今回は逆に浮気してい

ない証拠を探さないといけないのだ。

「んー。ダンナを何日か尾行して、浮気してたら黒、してなかったら白……ってことか」

「そうね。……ゲンさん、調査をお願いしていい？」

「おう、尾行なら元専門家に任せとけ！」

パート2 調査してみる

現在、夜の九時五十分。

「いや。なんでお前までついてくる？」

「その。暇だったから」

なんとも効率の悪い事に、黒のコートにマスク装備の私と、トレ
ンチコートを着たサングラス装備のゲンさんの二人で、和彦さんの
尾行調査をしているわけですが。

「専門家に任せろって言っただろ」

「私も一応、専門家なんですけど」

「……お前の場合、専門でもスキルレベルは低いけどな」

「ひどい。やっぱり晩御飯は割り勘ですね」

「……すみませんでした」

などと雑談をしながら、さりげなくターゲットと浮気相手と思わ
れる女性の二人組みの約二十メートル後ろを歩く。

ここは繁華街……というかいかわしい店が立ち並ぶ通り。人は
多いほうなので、ターゲットに見咎められて怪しまれる事はないだ
ろう。

「にしても、こんな時間にこんな所に女連れって時点で既に黒だろ」

「九時に会社を出て、バーで合流し、ここに直行。確かに黒っぽい
ですね」

ただ、ここで黒と確定するのは早い……はず。というか現状では
まだ依頼人の友人の証言と大差ないレベルの情報しか集まっていな
いのだ。

「つてか黒で確定だな。一応、人目をばからずに腕を組んだりキ
スしたりはしてねえみたいだが」

「一応、そこらへんの常識はあるんじゃないですか？」

ターゲットの二人は特に腕を組んだり手をつないだりするわけで

もなく、ただ雑談しながら並んで歩いている。つまり私達と同じような状態。

「だな」

ゲンさんは鷹揚に頷く。

ちなみに尾行の原則は相手に見つかからないようにコソコソすること……ではなく、いかにターゲットと周囲に怪しまれないように自然に振舞えるか、にある。

だからなるべく普通の通行人のフリをする方がいいのだ。

「それはそうと、ゲンさんって彼女とかいないんですか？」

「いねえよ。今は仕事が恋人、なんてな」

「その発言が許されるのって婚期を逃した女性だけですよ」

「……。そういうお前はどうかんだ？」

「今は仕事を軌道に乗せるので精一杯ですから」

「つまりは仕事がこ……いや、なんでもねえ」

割り勘が怖かったのだろうか、ゲンさんは私の一睨みであっさりと黙った。

*

「二十一時五十九分、二人して『リバーサイドホテル』に入る、か」
二人は、新装つばいきれいな外観のラブホテルの中に入っていた。

ゲンさんはすばやく手帳を取り出し、手馴れた様子でメモを取る。

「さて、確定だな」

「……そう、ですね」

私はどこかもやもやした思いを抱きながらも、覆しようの無い状況に、納得いかないまま頷く。

……普段なら迷わず黒と断定しているはずなのだが、美和子さんの一言に、私も感情移入してしまっているのだろう。

「でも一応、最後まで調査しましょう」

「そうだな」

打ち切るはずの調査を、私は続行する事にした。

「二十二時十分。出てきたぞ」

「ええ」

二人は、並んでラブホテルから出てきた。

「……二人が別れたら、手はず通りにいくぞ」

「了解です」

私が浮気相手を、ゲンさんが和彦さんを尾行する予定なのだ。

で。

しばらく歩いてみても、二人は別れる気配は無い。

「このまま帰宅、じゃなかったのかな？」

「どうだろうな。余韻を楽しんでるんじゃないか？」

「生々しい事を言わないでください」

などと言っていると、二人はとある建物の前で足を止める。

「は？」

私達が揃って間抜けな声を上げた。

なぜなら、二人の眼前にあるのは、さっきとは別なラブホテルだったからだ。

ちなみにこのホテルの外観もきれいで、開店後、間もない事が分かる。

「……お盛んなんだな？」

「……生々しい事を言わないで下さい？」

まさにアン・ビリーバブル。ちなみに信じられないという意味であり、そういう名前の人がいるわけではないのでご注意ください。

「あー……。二十二時二十三分、ホテル『ナイトタウン』に入る、だな……」

ゲンさんはあっけに取られたまま、それでもすばやくメモを取る。

「えっと。とりあえず待機、と言う事で」
「あ、ああ……」
私とゲンさんは痛む頭を押さえながら、溜息を吐いた。

*

全く奇怪な話である。

「なんなんでしょうね？」

「さあな」

ちなみに、私とゲンさんはホテルの向かいにあるファーストフード店の窓際で、ターゲットが出てくるまでの間を利用して遅い夕食を取っている。

「それに考えるのはお前の役目だ。俺には難しい事は分からん」

「またそうやって……」

私はポテトを口にほおり込みながら溜息を吐く。

「だいたいゲンさんは頭良いのに何でそう投げた事を言うんですか？」

そう。ゲンさんは某有名大学出身なのだ。私は高卒だつていうのに。

「記憶する事と、考える事は別なんだよ。学校の勉強なんて基本、丸暗記すればいいだけだしな」

「覚える事より、考える事の方が簡単だと思いますよ。ほら、本を書くより、集めて整理する方が簡単でしょ？」

「その例えは的を射ていないと思うが」

「むう」

私は唸りながら、更にポテトを口に放り込む。

ポテトのほくほくした食感と、わずかな塩味と、そして油っぽさが口の中に広がる。

「じゃあどんな例えだったら伝わります？」

「てか、わざわざ例えなくても言いたい事は伝わってるから」

「あら」

なぜか負けた気分になってしまつのは何故だろうか、などと思いつながら、私は炭酸飲料を一口。

明らかに人工なオレンジの味と、砂糖の甘さが炭酸がはじける音と共に広がる。

「それに……俺の浅知恵じゃあ、考えないほうがマシだからな」

「ゲンさん？」

窓の外を見上げ、溜息を吐くゲンさん。だけど、私にはその真意が理解できない。

「……お、出てきた。行くぞ」

「あ、はい」

切り替えるようにそう言われ、私は慌てて残りのポテトを口に放り込みながら立ち上がった。

ターゲットの二人は二十二時三十五分にホテルを出て、街を歩いている。

「まあ、さすがにもう帰る……のかな」

「分からん。追ってみるしかないな」

などと言っている内に二人は別れ、和彦さんは駅へ、女性の方はタクシー乗り場に並び始めた。

「ちっ……まづったな」

そう。私達は二人とも電車で帰ると予想していたのだ。

「とりあえず手はず通り行くぞ。お前はとりあえず女の方を追ってくれ」

「あ、はい」

私は慌ててタクシー乗り場へ向かい、それを確認したゲンさんは駅のホームへと消えていった。

*

結局、女性の方はそのまま帰宅。

翌日聞いたゲンさんの話では、和彦さんの方もそのまま帰宅したらしい。

そして何回か調査を重ねたが、二人は週一回のペースで密会し、そして毎回場所を変えながら、しかし今回と同じようなパターンを繰り返した。

ちなみに更に詳しい調査で分かったのは、相手の女性は山川加奈（仮名）、四十歳。某スポーツ新聞の記者で、既婚者。家族は息子と娘が一人ずつの一般的な家庭である。

私はここまで集めた情報を元に確信していた。
彼らは、不倫をしていない、と。

パート3 種を明かしてみる

「うー……」

今日は美和子さんに調査結果を報告する日。

ゲンさんはいえ、なぜか朝からずっと唸りっぱなしである。

「ゲンさん、どうしたんですか？」

私はメールでの依頼を整理しながら、声だけで唸り声の主に問いかける。

「お宅のダンナさん、好き者ですなあ。毎回、二軒以上のラブホに入ってやしたぜ……なんて言わなきゃならねえかと思うとな」

……なんで時代劇に出てくる悪役の町人風なんだろう？

「結果を報告するの、私ですよ？」

「じゃあお前が言うのか？ お宅のダンナさん好き者ですなあ、へっへっへっ……とか」

「言いませんから。そんな怪しい笑い方もしませんし。それに結局不倫じゃなかったですし」

「おう、そうか……って不倫じゃねえのか!？」

「違いますよ。だから安心してください」

「いやいや。黒じゃなかったのか？」

「黒じゃなかったんです」

私はそう言っ、とあるスポーツ新聞の切り抜きを集めて「コピーしたもの、やってきたゲンさんに渡す。

「ん？ これって最近やってた特集記事じゃねえか。これがどうかしたのか？」

「その記事の最後、記者の名前」

「記者の名前？ ……うおっ！」

「そんなわけで、不倫は勘違いだったんです。限りなく紛らわしいかったですけどね」

*

片付いた事務所内には、ほのかに紅茶の香りが漂って。
この事務所がいつもきれいなのは、実はゲンさんのおかげだった
りする。

「どうぞ」

「……ありがとうございます」

ゲンさんは、二人分の紅茶とクッキーを置いて、奥へ戻っていった。

「その……結果はどうだったのでしょうか？」

重々しい空気を纏う美和子さん。

私は極力、明るさを保ったまま、

「ご友人が見た女性との不倫は無かったみたいですね」

あっけらかんと、結論から先に言う。調査結果を先に言うとは絶対に誤解させてしまうからだ。

「そう、ですか」

美和子さんは深い、安堵の溜息を吐いた。

「これをご覧下さい」

私はさつきゲンさんに見せた切り抜きのコピーを、今度は美和子
さんに見せる。

内容は、美和子さんが初めてこの事務所にやってきた時に私が読
んでいた他社の女性記者とのラブホテル潜入調査シリーズと、その
もう一方の新聞での記事、それぞれの全四回分。

美和子さんはいぶかしげにそれを読み……気付いたようだ。

「私達の調査では、和彦さんとその女性記者がホテルに行ったのは
合計四回。それぞれ、内、実際に確認した三回分は、十分前後でホ
テルから出てきました」

そう。普通、ラブホテルに行つて十分で出る事はまずない。

「おそらくは二人でホテルに入り、それぞれ写真を撮ったり、設備

を確認したりして、それを元に記事を書いていたと思われる。二人が入ったホテルの名前と、その記事に出てくるホテルの名前も一致しています」

私はメモとホテルの名前が写った写真を見せる。

「……本当、ですね……」

「はい。……ただ、ご主人と一度よく話し合ってみてください。ご友人の誤解も解かなきゃ、ですしね」

「はい、分かりました」

彼女はそう言って、ここに来て初めての笑顔を見せた。

*

美和子さんが帰った後。

「いやあ、なんだかんだで夫婦の平和が守られて良かったな」

「ええ、まあ……」

それぞれテレビを眺めたり雑誌を読んだり、仕事とは思えない、でも割とよくある事務所の風景。ちなみにテレビを見ているのは私で、雑誌を読んでいるのがゲンさんである。

現在、朝の十時半過ぎ。この時間、やっている番組と言えば主婦向けの情報番組だけで、面白いものはやっていない。

一時はアニメの再放送をやっていて、それを欠かさず見ていた頃もあったが、その再放送もいつの間にか終わってしまっていて。

「にしても暇だな」

「ですね」

*

実のところ、私はある重要な事を依頼人に話さなかった。

私が調べたところ、依頼人の夫が女性記者とホテルに行ったのは全部で四回。つまり依頼人の友人には、一回目で目撃されたのだ。

実は何度もデートを繰り返していて、今回はたまたま二人で仕事でホテルに行き、それを見つけた……というセンも考えたが、全四回以外に二人が夜に会っていた証拠は掴めなかったし、偶然にしては出来すぎている。

つまり依頼人の友人は、偶然に二人のデート現場を目撃されたわけではなく、何らかの理由で依頼人の夫か女性記者のどちらかを追跡していた事になる。

そして、調べたところ、依頼人の友人と女性記者には何の接点もなく、逆に依頼人の夫とは、上司と部下の関係だった。

*

「でもまあ、そのうち、依頼人はやってきますよ」

パート4 エピローグ

初めて二人が顔を合わせたのは、おそらくは会社だろう。
上司と部下というより先輩と後輩の関係に近かった二人は、やがて……。

*

次の日の朝。

いつものようにインターネットでニュースの情報を集めていると、唐突にバタンと扉を壊してしまいそうな勢いで一人の女性が事務所に雪崩れ込んできた。

その女性は血走った目で、私を睨みつけている。

私はこの女性を知っている。

小和田敬子（いや、もちろん仮ですよ）さん、三十九歳。某スポーツ新聞の記者で……裏原和彦さんの部下だ。

漫画的表現をするなら額に怒りマークを浮かべている敬子さんは、取り繕いきれていない笑顔で頷き、ソファアに座る。

「ようこそ。ご依頼ですか？」

「ふざけないで！」

彼女はヒステリックな叫び声を上げながら机に両手を叩きつけ、立ち上がる。

「……さすが、新聞記者。調べるといふ面においては、探偵並ですね」

「人をコソコソ嗅ぎ回って、人の幸せを潰すようなのと一緒にしな

いで」
それについては恐らくお互い様なのだが、私はあえてそれに言及

せず、

「それで、結局どういった御用事ですか？」

私は呆れ顔プラスため息で問いかける。

「こういう用よ！」

彼女は肩にかけていた小型のバックに手を入れ……中から包丁を取り出し、刃を上向きに構える。

だが。

「止めとけ」

すばやく敬子さんの後ろに回ったゲンさんは、すばやくその右手を掴んでひねり上げ、包丁を取り落とさせる。

「放してよ！ 放して！ 返してよ、私の幸せを！」

「なんにせよ、人のダンナに手を出してたんだ。あんただって、人の事は言えんだろうに」

……私としてはホイホイ浮気なんかした男の方にも多大なる責任があると思うのだが。

*

「あの人に出会ったのは、三年前よ」

しばらく暴れた後にただ泣き崩れていた敬子さんは、やがてぼりぼりつりと自らの過去を語り始めた。

正直な話、そんなものを聞かされてもどうしようもないのだが、ただの興味本位で静聴する私とゲンさん。

「私が今の会社に就職して、上司が彼だった。彼はとっくの昔に結婚していたわ。私も最初からそれを知っていてから、恋愛の対象としては全く見ていなかった。彼も同じだったと思う。」

でもある日、仕事が終わらなくて、二人で残業した事があったの。何がきっかけだったか覚えていないけど、私達は関係を持つことになった。

不倫だという事も、それが良くない事も、知っていた。それでも

私は幸せだった」

まるで、夕方のドラマを見ているかのような錯覚。

名探偵なら、こんなとき、どんな言葉をかけるのだろうか。

「でも彼はある時、別れを切り出してきた。やはり家族のほうが大
事だって」

自分勝手な、男の言葉。自分の行為が、どれだけの人を傷つけて
いるのか……分かっていいるのだろうか？

「だったら、その家族がなくなってしまえば、そうすれば私と……
そう思ってた……」

「ちょうど仕事で女とラブホテルへ行くから、その事を友人でも会
った奥さんに話したんですね」

「そうよ。それで全てが上手くいくはずだった。なのに……」
探偵がしゃしゃり出てきて、全てを上手く丸めてしまった。

「……でもよ」

やがて、ゲンさんが口を開いた。

「ぶっちゃけあんた、自業自得だぜ？ 人の幸せを壊そうとしたん
だ。ならそれが自分に返ってほぐわあつ！」

私はいきなり訳の分からない事を言い出したゲンさんの顔面に無
言でストレートパンチを叩き込む。

「その、あなたは逆の立場で考えて見なかったんですか？」
「……逆……？」

敬子さんは若干だけ引いている様子で私とゲンさんを見比べなが
ら、眉をひそめる。

「仮にあなたが和彦さんと結ばれたとしましょう。そしたらもう和
彦さんは浮気をしませんか？ 他の女性と、流れで関係を持ったり
しないと、本気で思えますか？」

「……それは……」

私はドラマの名探偵になりきって、話を続ける。

「後ろめいた幸せより、前向きな幸せを探して下さい。私からはそ

れだけです」

私は包丁を拾い上げ、彼女に渡す。

彼女は無言のまま事務所を後にし……

そして、小さな事件は幕を下ろした。

とある私立探偵の事件簿・ファイル2 ～スポーツ新聞記者浮気
事件～ 完

パート4 エピローグ（後書き）

以上、ファイル2でした。

その、中々にアレな話になってしまいました。パート2の最後で『は？』と言っていただければそれで良いかな、と。

お付き合いいただきありがとうございました。懲りずに続編を書く予定です。もしよろしければそっちにもお付き合いいただきますよう、よろしくです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2494c/>

とある私立探偵の事件簿・ファイル2 ~スポーツ新聞記者浮気事件~

2008年8月29日17時43分発行